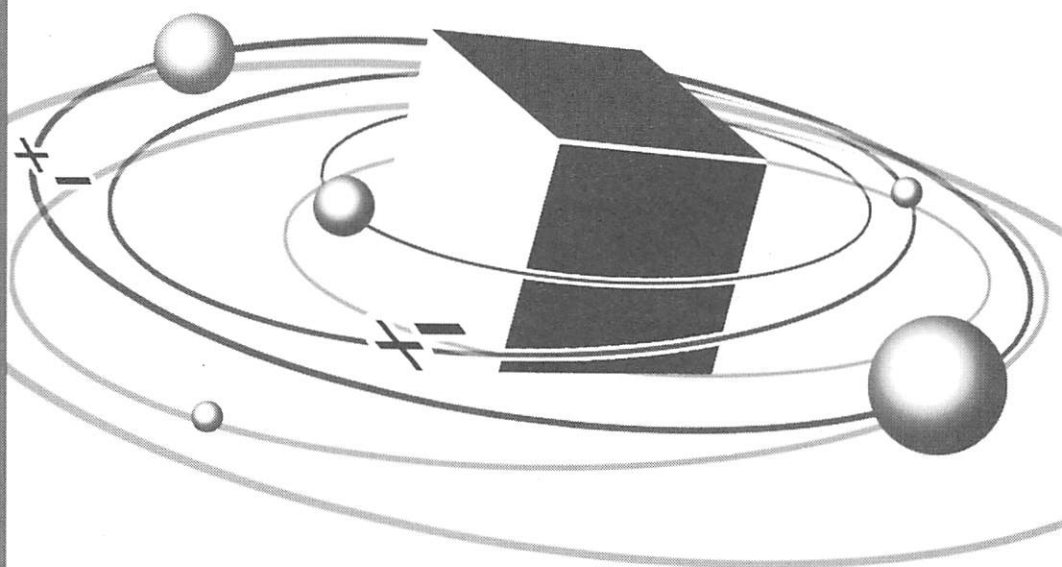


平成18年
11月号

250円

やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



英知の輝き、もしくは哲学への私見
サブル(忍耐)
聖なる旅路—1
無常と永遠

年老いた人々へのメッセージ

『ツバル』TUVALU

言葉を受けとる者、言葉は受けとるもの

「この聖なる旅路でああなたが最も多く聞くことになる言葉は、『忍耐を、巡礼者よ！ 忍耐を、巡礼者よ！』というものになるでしょう。忍耐が実に必要とされることでしょう。動かないような時間、終わることのない旅路、炎天下での待機、そして悪魔(シャイターン)が人々の目に醜くみせている、他の人々の状態、振舞いへの嫌気などは、忍耐によってのみ克服されるのです。」p. 12



編集部より

ラマダーン明けの祭り「イード・ル・フィットル」が終わると、今度やってくるのはイスラームのもうひとつの祝祭「イード・ル・アドハー（犠牲祭）」です。この日ムスリムは預言者イブラーヒームの故事に倣って動物を犠牲に捧げます。「犠牲」という言葉には、このように動物などを神に捧げる儀礼という意味の他に、戦争や災害などで亡くなること、そして何らかの目的のために大切なものを差し出すという意味もあります。

この「犠牲」という言葉には、どこか被害者的な、苦痛をもたらされるようなニュアンスが感じられます。しかし日々の生活は、特に上記の三番目の意味で使われる犠牲がなければ成り立たないように思われます。例えば思わぬ災難に見舞われた人にお金を寄付したり、困っている人の手助けをすることは社会生活を潤滑にする上で非常に重要なことです。が、財産や時間、労力など人が所有するものの一部を割くこととなり、ある意味犠牲を払っていることになるわけです。

私たちには自らの所有物に対する執着心、また自己保身の念があります。何かを手放すことには一般的に苦痛を伴います。また何事にも対価や見返りを求めるのが当然と考えたり、心のどこかで期待したりします。善意で行ったことでさえ、結果が思い通りでなかったり自分自身が傷を負うと憤りを感じてしまうものです。しかしそれは自分が与える側だとの錯覚に囚われてしまっているからではないでしょうか。所有する財産や能力を、永久不滅な、濫用できる特権のように思い込んでいるからではないでしょうか。そういった所有物はたまたま各々の手元に留まっているだけでいつ失われるか誰も分からないものです。

あらゆるものの帰属先は誰でもなくどこか別のところにあり、人や何かを通じて流れているだけだとみなし、必要なものはそこからやってくると考えれば、手元にあるものに固執して視野を狭めることなく、犠牲を犠牲とも思わず、苦はそれほど重荷とならず、誰もが少しずつ気楽に生きられるようになるのではないかという気がします。



編集部より	2
英知の輝き、もしくは哲学への私見	3
祈りのある毎日へ	5
クリームシチュー	5
サブル（忍耐）	6
預言者ムハンマドが教えた予防医学	10
聖なる旅路 1	12
無常と永遠	17
年老いた人々へのメッセージ	19
イスラームの竹	22
『ツバル』 TUVALU	26
言葉を受けとる者、言葉は受けとるもの	28





全体に対して対抗することは過ちです。しかし、全体が全体として存在している時にはこれが真実であったとしても、その逆を同意することも過ちです。技術者が病気について示した見解について意見を異にすることは過ちではなく、同様に設計上の計算について医師からの意見を取り入れないことも、過ちとは見なされません。

無力さとは、単に力がないこと、能力がないことを指すものではありません。力があり、能力があるのに、それが利用されず、活かされていない多くの人がいます。彼らもまた、無力であると見なされるのです。

光源が放つ光は、圧力によって消されることもなく、また他の光によって台無しにされることもありません。このようにして光源は、その命のある限り、何があろうと明るく輝き、周囲を照らすのです。

知恵は、信仰によって自らの装備を行なうことをしない人にとっては、自らに苦痛を与える道具となります。

ただ、見て、それを実行する人は、それを知って実行する人ほどには成功しているとは言えないように、知った上で実行する人も、良心でそれを感じて実行する人ほどには成功しているとは言えないのです。

お金がないことだけではなく、知識がないこと、考えがないこと、技術がないことなども、それぞれが貧しさと言えます。だから知識がなく考えがなく技術もない金持ちは、ある意味で貧しい人でもあるのです。

メガネが目を助けるように、目は知性の、知性は洞察力の、洞察力は良心の、良心は魂の観察用の窓であり、見ることへの媒介となります。

人間とは一つの木のようです。民族はその枝です。強い風にも似た様々な事件が、それらを互いに強くぶつけあわせます。害を被るのはもちろん、木です。「皆、何を行なおうと、自分に対してそれを行なったことになる。」と言う言葉の意味も、おそらくこれなのでしょう。

夜は、人間の発展、発達、そして幸福、幸運の準備のために開かれた広間のようです。偉大な思想、偉大な作品は、いつもこの暗闇の子宮で発達し、人類の為に役立てられてきたのです。

胃は、消化できないもの、役に立たないものを吐き出し、それにつばを吐きかけます。益をもたらさない人々に対しても、時間と歴史は同じことを行ないません。

サビは鉄の、鉛はダイヤモンドの、^{ほうとう}放蕩は魂の敵です。今日ではなかったとしても、必ずそれをだめにしてしまうのです。

黄色いもの全てが金ではなく、輝くもの全てが光ではなく、流れるもの全てが水ではないのです。

あらゆる洪水は、気にも留められないような小さな一滴から始まり、耐えられないほどの状況に至ります。社会の構造も、こういった洪水の危険にいつもさらされているのです。時にはこうした洪水は、防御壁になろうとする人達をも押し流してしまいます。

無作法な人達に知識や真実を教えることはとても困難なことではあっても、真実を伝えようとする人はこの

任務を喜んで引き受けなくてはならないのです。

災いのうち、最も危険なものは、笑いかけながらやってくるものです。

むき出しの真実は、皆が同じレベルで理解することができないため、抽象化ではなく、擬人化、体現化といった手段が選ばれてきたのです。

苦情はいつも、時間や場所に対して行なわれます。しかし、真の罪は無知にあります。時間や運命に罪はありません。人間はととも恩知らずで無知なのです。

国土は森ではなく、庭のようなものです。その整備においては、果実をもたらす若木や花が必要とされています。

庭を、雑草で埋め尽くされるままに放置した後で、「なんて運命なんだ！」と嘆く人に対しては、なんと言ったらいいのでしょうか。

日光に溢れ、芝生に覆われ、花が一杯の輝かしい道でありながら、死の砂漠に通じているものがたくさんあります。とげに覆われ、険しく通りにくい細道を行くと、スラート橋の天国側に至ることも多くあります。

最も偉大な英知の一つは、「人は言葉の影に秘められている」というものでしょう。これよりもなお偉大なものは、「親友を求めるならアッラーで十分、友を求めるならクルアーンを。」という言葉です。

人はその意識と、意識されたものを知っています。しかし意識している存在を知らずにいます。理解するのは魂であり、知性はその媒介です。見るのは魂であり、目はその媒介なのです。

行動が、知恵もしくは天性の動機の結果であればそれは動物的であり、意志と良心による動機に基づいていれば、その時は魂によるものであり、人間的です。

存在しないことは、恐ろしい無の状態です。無とは無限の、気の遠くなるようなゾーンであり、そこでは存在するものを示す一つの微粒子すら見出すことはできないのです。

今日、信心深い人達は「狂信的」と言われます。狂信とは、迷信に固執^{こしつ}することであり、何も分からず偏屈に主張することです。真実を主張することは美德であり、信者のこの行為は決して狂信ではありません。

神聖な意義に依らない哲学は、思想の音律が外れた状態です。

真の哲学とは、ただ、アッラーが、人々を英知に目覚めさせることによって生じる、魂と思考の苦行なのです。





ドゥア（祈り）のある毎日へ

寛大に赦すお方よ

恵み多きお方よ

善の多大なるお方よ

恵みの満ち溢れるお方よ

創造の細やかなお方よ

恵みを継続するお方よ

困難を取り除くお方よ

害を取り除くお方よ

王権の主よ

正しく判決を下すお方よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄の炎からお助け下さい。*



レシピコーナー

クリームシチュー

材料：牛乳 1カップ

水 1カップ

チキンブイヨン 1つ

塩、コショウ 少々

鶏肉 お好みで

玉ねぎ お好みで

野菜（何でもOK）

バター 少々

小麦粉 大さじ1

作り方：1.鍋にバターを入れる。

2.玉ねぎを炒める。

3.鶏肉を炒める。

4.牛乳を加える。

5.ブイヨンを加える。

6.沸騰したら水を加え、野菜を全部入れる。

7.30分位煮て出来上がり！

*偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌルカビール）には、祈願（きがん）、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鑑が必要です。本来、偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



サブル(忍耐)*

サブルは、文字通りの意味としては、苦痛や困難に耐えること、辛抱すること、我慢すること、問題に落ち着いて対処することです。より一般的な意味としては忍耐であり、それはクルアーンで言及されている最も重要な心の行為の1つです。そしてその重要性ゆえに、サブルは宗教的生活の半分とみなされています。(もう半分は感謝です。)

クルアーンでは、『忍耐と礼拝によって、(アッラーの)御助けを請い願いなさい。(聖クルアーン雌牛章 2:45)』『あなたがた信仰する者よ、耐え忍びなさい。忍耐に極めて強く、互いに堅固でありなさい。(イムラーン章 3:200)』などで何度もサブルが命じられ、『かれらのために急いではならない。(砂丘章 46:35)』『決してかれらに背を向けてはならない。(勝利品章 8:15)』などでは、あわてないようにと注意されています。クルアーンのたくさんの章句において、アッラーは忍耐強い人々を賞賛され、彼らを愛されていると言明され、さらに彼らに与えられた地位について述べられています。『よく耐え忍び、誠実で、敬虔に信奉して、(道のために賜物を)施し。(イムラーン章 3:17)』『誠にアッラーは耐え忍ぶものを愛でられる。(イムラーン章 3:146)』『本当にアッラーは耐え忍ぶ者と共におられる。(雌牛章 2:153)』

クルアーンでは、サブルの他の多くの面についても述べられています。たとえば『あなたがたがもし耐え忍ぶならば、それは耐え忍ぶ者にとって最も善いことである。(蜜蜂章 16:126)』では、アッラーのメッセージを不信者たちに伝える際に、不信者たちにはサブルをもって接するべきだとアドバイスされています。『われは耐え忍ぶ者に対し、かれらが行った最も優れた行為によって、報奨を与える。(蜜蜂章 16:96)』では、来世で与えられる最善の報奨で忍耐強い人々を励まされています。『あなたがたが耐え忍んで、主を畏れるならばもし敵軍が急襲してきても、主は、五千の天使でああなたがたを援助されるであろう。(イムラーン章 3:125)』では、信仰する者たちに、サブルに対するアッラーの援助が約束されています。

忍耐と感謝に関する次のハディースは非常に意味深いものでしょう。

「信仰する者にとってあらゆる出来事は、利益となるものである。これは、信仰するものにしか起こらない。もし良い出来事があつたら、彼はアッラーに感謝し、それは彼にとって利益である。もし悪い出来事があつたら、彼はそれに耐え、それもまた彼にとって利益なのである。」

サブルの特徴は5つに分類することができます。①-真にアッラーのしもべであることや、通常の崇拝行為を忠実に実行することに関する困難に耐えること、②-罪を犯すようにという世俗的な自分自身やシャイタンの誘惑に耐

* この文章が “Key Concepts in the Practice of Sufism” より訳です。

えること、③-来世のあるいは現世の災難に耐え、そしてアッラーの御意思に甘んじて従うこと、④-正しいを進み、逸脱を引き起こす現世の魅力に負けないことに関して誠実であること、⑤-達成するために一定の時間を要する希望や計画を実現するときに慌てないことです。

サブルの程度については6つに分類することができます。①アッラーのために忍耐を示すこと、②忍耐を示し、それはアッラーのお陰だと考えること(アッラーが自分が忍耐を示すことができるようにしてくださっていると確信を持つこと)、③アッラーは御自身の知恵によって振舞われているということを理解し、アッラーからもたらされるものは何であれ忍耐強く受け入れること、④アッラーの道において起こるどんなことにも甘んじて従うこと、⑤時部が到達した精神状態を明らかにしないことで忍耐を示し、アッラーへの近さを守ること、⑥死んでアッラーに見えたいという深い欲望にも関わらず、アッラーのメッセージを人々に伝えるという自分の任務を全うしようと決意することです。

サブルには他の定義もあります。たとえば、不運に見舞われたときに自分の態度を保つことや、何か出来事があったときにも忠実であり、ためらいの気配も見せないこと、現世的な欲望や自分の気性による衝動に決して屈服しないこと、クルアーンとスナナの命令を一種の樂園への招待状として受け入れること、自分の魂や愛する人々を含めてすべての所有物を真実の御方、愛されるべき御方アッラーのために捧げることなどです。

クルアーンの文章の秘密や深遠な意味に興味を持った解釈者たちは、『あなたがた信仰する者よ、耐え忍びなさい。忍耐に極めて強く、互いに堅固でありなさい。そしてアッラーを畏れなさい。そうすればあなたがたは成功するであろう。(イムラーン章 3:200)』について次のような解釈をしています。

宗教的義務を実践することに忠実であり、自分にとって喜ばしくないあらゆることに耐えること、また、アッラーへの愛を保つことであり、アッラーに見えたいと願うことです。あるいは、アッラーのためとなるすべての自分の責任を果たし、アッラーに喜んでいただくこと、そしてアッラーが不断に自分を監督されているという自覚を常に持つことの困難さに耐え、アッラーの無限の力を感じることです。他には、アッラーの恩恵が自分に注がれているときさえも、逸脱することなく、まっすぐな道を進むことに忠実であることや、すべての困難や苦難に耐える決意をし、何が起ころうとも、アッラーとのつながりもしくはアッラーへの信奉を保つことがあります。

サブルへの他のアプローチとしては、この宇宙に存在するものや起こることすべてが全能のアッラーゆえのものであると考え、喜ばしいように見えることには感謝し、喜ばしくないように見えることも甘受するということがあります。逆境や困難、果たすことの難しい責任、あるいは犯してしまうかもしれない罪を克服しようとするときに、信仰する者はアッラーに対してその荷を降ろしますが、それはアッラーに対して不平不満を言っていると考えられるべきものではありません。むしろそれは、信仰する者がアッラーに助けを願い、アッラーの下に保護を求める方法だと言えます。このような行為が、アッラーやアッラーに定められた運命に対する不平や抗議と考えられる余地はないのです。実際に、その人の意図によっては、このような行為は、アッラーを信頼し、アッラーに服従することによって、祈願や懇願ともみなされる

ことがあります。

預言者アイユーブ(ヨブ)(平安あれ)のアッラーに対する『本当に災厄がわたしに降りかかりました。だがあなたは、慈悲深いうえにも慈悲深い方であられます。(預言者章 21:83)』という泣き声や、預言者ヤアコーブ(ヤコブ)(平安あれ)の『わたしは只アッラーに対し、わが悲嘆と苦悩とを訴えている丈である。(ユーヌフ章 12:86)』という呻きは、アッラーの哀れみと思いやりに対する祈願や懇願なのです。アッラーは預言者ヤアコーブ(平安あれ)が忍耐と祈願の素晴らしい、優れたしもべであることを『われは、かれが良く耐え忍ぶことを知った。何と優れたしもべではないか。かれは(主の命令に服して)常に(われの許に)帰った。(サード章 38:44)』と賞賛されました。

預言者たちや信仰の深い人々の最も顕著な特徴の1つは、あらゆる形や程度におけるサブルの体現であり、彼らはアッラーへの最高の信仰から逸れることなく、アッラーのメッセージを人々に伝えることに最善を尽くし、そこから生じるあらゆる逆境や困難に耐えることです。すべての被創造物に対する恵みであられる預言者ムハンマド(平安と祝福あれ)は、次のようにおっしゃいました。

「人間のなかで、最も厳しい逆境にあったのは預言者たちであり、次いでそれぞれの信仰の程度に応じた人々である。」

サブルは信仰、精神状態、アッラーへの近さにおいて、最も優れていて他の人々を真実へと導く人々の本質的な性質です。さらに、サブルは最終目的地へ向けて進んでいる人の力の源でもあります。最も進んだ人々が最も厳しい逆境を経験するということは、彼らは完璧にサブルを体現しているということであり、それが彼らに与えられた地位の代償として彼らが払っているものです。最終目的地へ進むことが運命付けられた他の人々は、彼らに起こるあらゆることを耐えることによって、他の人々が別の頻繁な崇拝行為によって歩んだ距離を越えるのです。これらの人々について、預言者ムハンマド(平安と祝福あれ)は次のように述べられています。

「アッラーがしもべを、自分の宗教的行為によっては辿り着けないほどの地位に運命づけられた場合には、アッラーは彼が彼自身や家族のために苦しむようにし、すべての苦しみに耐えられるようにサブルを身につけさせる。アッラーは彼をそのサブルによって、運命づけられた地位まで高められるのである。」

それゆえ、耐えるべき苦難、自分の責任を果たすことにおける困難、罪の重圧は、潜在的に慈悲を持ち、慈悲はサブルによってひきつけられるのです。これらの苦痛を甘受している人は、その荷を他の誰に対しても降ろすべきではありません。フディーラーの次の言葉は何と美しいものでしょうか。

「愛する者と自分を呼ぶならば、愛の苦悩に不平を言ってはならない。

不平を言うことで、他人に自分の愛の苦悩を知らせてはならない。」

アッラーへの道の旅人は、愛に燃えることや泣くことも、苦悩に果てることも知っているべきですが、このような

愛や苦悩について決して他人に不平を言うようなことはありません。たとえ山のように重い困難や責任につぶされたとしても、他人に不平を言うべきではないのです。

ルーミーはこのような程度のサブルについて、次のようにまとめています。

「人が生きるために、膝の力の素となり、眼の”光”となり、生命を維持するための物質であるためには、ほんの一握りの小麦が、地面に埋められ、発芽し、育てて空気の中に出てこなければならない。それは地面との激しい闘いの末に空気の中に出てきたに違いなく、そして刈り取られ、脱穀され、粉ひき器で挽いて粉にされる。その後、こねられ、オープンで焼かれ、そして最後に歯で噛まれて胃に送られ、消化される。」

真の人間らしさを得るには、人はそれぞれ何度も“ふるいにかける”か“蒸留され”て、自分の真の本質を発見しなければなりません。そうでなければ、真に人間らしくあるために自分の可能性を最大限に伸ばす能力が発揮できないのです。

アッラーのしもべは苦しむようになっているのです。アロエの木が燃えるようになっているように。

サブルは、アッラーのしもべの本質的で最も重要な特性であり、それはアッラーが運命づけられたあらゆることを甘んじて受けるという、アッラーの目から見た最高の精神状態という栄誉で報いられるものなのです。





預言者ムハンマドが教えた予防医学*

信頼できるということ

預言者たちの二つめの特徴は、信頼がおけるということである。この言葉「アマーナー」はアラビア語で、信心「イーマーン」と同じ語幹を持つ。「ムーミン」は信仰し、その振る舞いでもって信頼がおける者であることが明らかである人という意味である。預言者たちは、ムーミンとして最高の人々であり、誠実という点でも最も高い地点にいる人たちである。聖クルアーンでも、彼らのこの特質がいくつもの章で明らかにされている。ここで一部を紹介したいと思う。

「ヌーフ（ノア）の民も、使徒たちを信じなかった。彼らの同胞のヌーフが、彼らに言った時を思い起こしなさい。『あなた方は、主を畏れないのですか。本当に私はあなた方への誠実な使徒です。それでアッラーを畏れ、私に従いなさい』」（詩人たち章26／106～108）

聖ヌーフは、その民に、次のように言っているのである。私は信頼でき、誠実で、信託されたものを守る、使徒である。つまりこの章では、一人の預言者の言葉から、預言者たちにおける誠実という特質が、明らかにされているのである。

「アードの民も、使徒たちを嘘付きであるとした。かれらの同胞のフードがかれらに言った時のことを思い起こしなさい。『あなた方は主を畏れないのですか。本当に私はあなた方への誠実な使徒です。だからアッラーを畏れ、私に従いなさい』」（詩人たち章26／123～126）

「サムードの民も、使徒たちを嘘付きであるとした。かれらの同胞サーリフが、かれらに言った時を思い起こしなさい。『あなた方は主を畏れないのですか。本当に私はあなた方への誠実な使徒です。だからアッラーを畏れ私に従いなさい』」（詩人たち章26／141～144）

「ルート（ノア）の民も、使徒たちを嘘付きであるとした。同胞ルートが、かれらに「あなた方は主を畏れないのですか」と言った時のことを思い起こしなさい。『本当に私はあなた方への誠実な使徒です』」（詩人たち章26／160～162）

この形で、もっとたくさんの章を紹介することは可能である。印として信頼と誠実とを説明する多くの章がある。しかしここでは以上の章で十分としよう。

ムーミンは、アッラーの御名の一つでもあり、同時に彼を信じる者たちの重要な名前の一つでもある。ア

* この文章は “Prophet Muhammad: Aspects of His Life-1” よりの訳です。

ッラーに対してなぜムーミンと言われるのであろうか？ なぜなら、アッラーは、信頼の源であるからである。我々に信頼を与えるのもまたアッラーである。預言者たちを誠実なものとされるのも、アッラーである。信用、信頼、誠実さといったものは、我々を預言者たちに、そして預言者たちをアッラーに結びつけるのである。結果として、この結びつきは我々を、創造者と被創造物の関係に導く。これらの意味は全て、信頼という言葉から生じるものであり、そもそもこのテーマの最も重要なポイントは、この関係を把握することである。


預言者たちの、そして預言者ムハンマドの最も重要な特質が、誠実であると同様に、天使ジブリール（ガブリエル）の最も重要な特性も誠実さである。聖クルアーンでは次のように語られている。「従われ、信頼される（使徒である）。」（包み隠す章81/21）ジブリールは、アッラーに従い、アッラーによって与えられた任務によっても、信頼できる使徒である。このようにして、聖クルアーンは我々の元へ、信頼できる存在によってもたらされたのである。アッラーはムーミンである。アッラーの公表は、信頼できることが明らかなものである。聖クルアーンは、アッラーによって命じられたジブリールによってもたらされたものである。そして聖クルアーンは、信頼される預言者に、そしてその信頼を負う候補であるウンマに、もたらされたのである。

聖クルアーンから、誰もが、それぞれの段階に応じて利益を受けているはずである。ジブリールもそのうちの一人である。ある時彼は預言者ムハンマドに次のように述べている。「アッラーが、聖クルアーンで私のことを「信頼」されるという言葉で語られるまでは、私は自分の責任について不安を持っていました。この言葉を聞いて、私は安心で満ち溢れました」

預言者ムハンマドにおける誠実さ

預言者ムハンマドはまず、アッラーにより与えられたメッセージに対して、誠実であられる。ほんのわずかであれ不誠実であったことは考えられない。それから、被創造物に対しても誠実である。皆このお方を信頼する。なぜならまず彼が、皆に誠実さを示し、信頼できるということを現わしたからである。それから、我々に、信頼されるということ、誠実であるということがいかに大切であることを示され、そして我々を信仰に導かれたのである。ここではそれらを順に追ってみたい。





年齢やそれまでの生きざまにかかわらず、もう一度子供時代の純粹さを獲得させてくれる行為の一つが、巡礼(ハッジ)です。宗教的には巡礼とは、イバーダ(崇拜行為)として、定められた時期にアラファトに一定期間滞在し、その後バイトゥッラー(アッラーの館)といった一定の地点を、定められた形式に従って訪問することを意味します。

何ヶ月も前から始められる準備、そしてその後何年も残る影響を考えると、まさに巡礼は、この世の人々の天空への旅のようです。

「この家への巡礼は、そこに赴ける人びとに課せられたアッラーへの義務である。」(イムラーン家章第97節) という形で義務であることが告げられているように、アッラーへの義務として、そしてアッラーのお慶びのために行なわれなければなりません。

巡礼は、一つの学び舎です。この世から離れ、物質的喜びから完全に遠ざかっていることを示すかのように、その建物は急峻な斜面や固い岩の間に存在するのです。

この短期の、しかし深い影響を与える学び舎は、海辺に造られてはいないのです。試みに秘められた神秘として、険しい外見を持つマッカの荘厳な雰囲気の中に造られたのです。

この学校を出ることはある意味、永遠の幸福を得ることであるということに気づいた人達は、卒業証書を受けとることのできる生徒となるため、何年も祈り、備え、カーバの、そして巡礼の空気に浸るのです。そして終わりのないような長い時間を過ごした後、純粹な意志、合法な手段で得た稼ぎから捻出した旅費を持ち、後に残る人達に別れを告げ、聖なる土地への旅を始めるのです。

もしあなたも、この道を行き始めた一人であるならば、この世的な、物質的なものを心から消し去り、地位や階級、名誉を忘れ去って、しもべの中の一人として、清らかな、恵みに満ちた、そして霊的な旅を始めることになるのです。

この聖なる旅路であなたが最も多く聞くことになる言葉は、『忍耐を、巡礼者よ！忍耐を、巡礼者よ！』というものになるでしょう。忍耐が実に必要とされることでしょう。動かないような時間、終わることのない旅路、炎天下での待機、そして悪魔(シャイターン)が人々の目に醜くみせている、他の人々の状態、振舞いへの嫌気などは、忍耐によってのみ克服されるのです。

マッカとカーバ

預言者ムハンマドのゆりかごであったこの輝かしい古都に近づくにつれ、説明できないような思い

でいっぱいになり、あらゆる丘で、あらゆる曲がり角でハラームモスクやカーバの姿を探し求めるようになるでしょう。今日の資本主義社会を思い出させる珍奇な建物や広告が少々私達の内面を痛めたとしても、私達の心は目的地への思いで満たされ、一瞬でも早く、ドゥアーが聞き入れられ、客となるべきアッラーの家に辿り着こうと努力するでしょう。そしてついに、暗い大きな建物群の間から、控えめな、しかし、彼方からもたらされる香りであなた方を魅了してやまないアッラーの館を目にするでしょう。

許しを求めている罪を犯した子供のように、私たちは中に入ります。そしてそこでカーバ神殿を見て、私達が最初に行なうドゥアー、そして受け入れられると信じているドゥアーが心に浮かぶでしょう。「主よ、このドゥアーを、そして今後行なうドゥアーを受け入れてください。」という言葉、あなたは思い出すでしょう。そして今、あなたはまさにカーバ神殿の前に立っているのです。長い間、「それを見ることができれば私は倒れんばかりになり、泣き、叫んでしまうだろう。」と言い続けてきたカーバが、あなたに微笑みかけているのです。あなたは泣くことも、叫ぶことも、ひれ伏して祈ることも、ドゥアーを行なうこともできません。まさにあなたは凍り付いてしまったかのようなのです。しばらくあなたはそうしているでしょう。そして予定していたドゥアーを何とか唱え始めるのです。

「黒い石」は、天国からの贈り物なのです。それに挨拶を送り、もし可能ならそれに口付けをする時、ウマル様のことを思い出すでしょう。彼が「ああ、石よ！私は知っている、あなたはただの石なのだ。あなたには害も益もない。もしアッラーの使徒があなたに口付けするところを見なかったなら、私はあなたに口付けしたりしなかっただろう。」と言うのを聞き、あなたもその唇を、何百万もの聖なる唇が触れてきたその石に触れさせたいと願うでしょう。

多数の中での孤独

何十万ものイフラーム姿のしもべたちの中で、他の人々と同じようにただアッラーのしもべであるという地位によって誉れを与えられた何十万もの人々の中で、そこには地位や財産はなく、ただ挙げられた手、地において天へ近づこうとする頭、そしてそこで流される涙が存在するのです。何十万もの人々の中であなたは一人きりです。ここにおいてあなたは、多数の中での孤独を把握しようとするでしょう。限りなく慈悲深いお方があなたの声をも聞かれ、ご覧になられていることを認識し、その空間から他の人々が取り除かれ、あなたとそのお方だけがそこに残るのです。あなたの心にあるものをそのお方に訴え、悩み苦しみを全て打ち明けます。この状態はあなたを軟化させ、慈しみの心を強いものとし、あなたの心にある愛はその活動を活発化させます。そしてあなたは、周囲を異なるまなざしでみるようになっていくのです。黄色い肌の人、黒い肌の人、民族や人種、国を気にすることなく、あなたは大きな愛情でいっぱいになっているのです。一人のスーダン人があなたの挨拶と微笑みに対してどれほど喜んで見ているかを見、一人のモロッコ人に対してもあなたはその気持ちを惜しみなく示すでしょう。あらゆる民族のムスリム達と宗教上の兄弟となったという比類なき喜びを味わいましょう。「アッサラームアライクム」の挨拶と微笑みの中で。

あなたがこの愛情と兄弟としての一体感の中にいる時、あなたの隣で、あなたの前で、あなたの後ろで、あなたと共にカーバの周回を行なう信者達の、心の最も深いところからのうめき声をも、あなたは聞くでしょう。あなたの両手を彼らの両手と共に崇高なる神の御前に差し上げ、頬を伝う涙の中で「アーミン」と言うことになるでしょう。

時には、預言者達、聖人達、天使達と肩を組んで周回を行なっているかのように感じ、夢を見ているのだと思うこともあるでしょう。そして眠りから覚める不安に襲われるでしょう。

サファーとマルワの間を行き来することは、あなたにハジャルとイスマーイールを思い出させます。あなたはハジェルとなり、あなたの目はイスマーイールと、カーバ神殿、サファーとマルワの間を行き来するでしょう。あなたは水を探し求めるでしょう。あなたの過ち、不足、弱さを清める水を求めるでしょう。そしてその水の最初の源はあなたの目となるでしょう。

アッラーの館での礼拝は、とても特別なものです。人々はカーバ神殿の周囲を回ります。確かにこれが真実ですが、神の親友とされる人々が存在し、カーバは彼らの周りを回るのです。ムエZZインがアザーンを唱える時、あなたは、飛行機が離陸する時のアナウンスを聞いたかのようになるでしょう。イマームが最初のタクビールを行い礼拝を始めると、カーバはゆっくりと動き始めるのです。あなたもその翼下に抱き、神の親友達への、そして自分自身は来られなくても心はカーバにいる忠実なしもべ達への訪問に出かけるのです。その時あなたは飛んでいるように感じるでしょう。礼拝はこの上なく魅惑的で、クルアーンは人を魅了し、信者の心はまさに惹きつけられたようになっていて、その雰囲気がいつまでも終わらないことを願うでしょう。礼拝の最後のサラームで、あなたは再び最初の場所に戻っているでしょう。

あらゆるところにそのお方がいる

時間に応じ、アラファトの前にバイトゥッラーで礼拝、周回、クルアーン、そして熟考を行ないます。預言者ムハンマドとイスラームの歴史の足跡の残るマッカを、あなたは歩くでしょう。ハティージャ様も埋葬されている墓地を訪ね、その聖なる住民達に挨拶を送るでしょう。そしてヒラーの洞窟へ向かうでしょう。頂上に近づくにつれ、あなたは近くにある全ての石に手を触れ、全ての岩に口付けをして、「アッラーの使徒も必ずこれに触れられたに違いない。」という思いを抱きながら進むのです。」

あなたの心は何世紀も前に遡り、預言者ムハンマドがその洞窟で、光も音もない中で、人々の幸福を手に入れる為に味わわれた悩みや痛みを把握しようと努めるでしょう。ジブラーイルが再びまたやってきたように感じられ、彼が「読め。」と言うでしょう。あなたは預言者ムハンマドの目でカーバの方角を見ようと努め、当時の暗いマッカに思いを至らせるでしょう。無限の光となる為に彼が味わわれた苦しみを、はるか遠くからとはいえ、感じようとするでしょう。

あなたは翌日にはサウルの洞窟に行くでしょう。アッラーの使徒を守る覆いとなったあの鳩、あの

蜘蛛になることを思うでしょう。アブー・バクル様がアッラーの使徒を守ろうとして感じた緊迫感によってあなたの鼓動は早くなるでしょう。そこで預言者ムハンマドが言われた「恐れるな。アッラーは我々と共におられる。」という言葉に安心を感じるでしょう。そしてもう一度マッカを、カーバを眺め、預言者ムハンマドのお声を聞くでしょう。「ああ、マッカよ。あなたをととても愛していた。彼らが追い出さなければあなたを離れることはなかつたらう。」と呼びかけられるお声を。

この望郷の思いは、もう一度あなたの涙によって涙に濡らされるでしょう。預言者の道の一端を改めて思い起こすでしょう。聖遷、望郷、別離・・・。

時には、ビラールが不信心者達に大声で怒鳴った「唯一なのだ！アッラーは唯一であられるのだ！」という声に耳を傾け、時にはアンマールの孤独を心で実感し、また時には偶像崇拝者の弾圧を受けた初期のムスリム達が、教えを守るために全てに耐えたこと、その沈黙の深みを感じて泣きながら、マッカの通りを歩くでしょう。あなたが歩く道は、アラファトに行く前の最後の準備を行なうべき地点、犠牲と慈しみ、命令への服従を理解させる土地、ミナーに至ります。ミナーは、あなたを数回の礼拝の時間だけ休ませた後、あなたをアラファトに送るのです。

アラファト、ムズダリファ、ミナー

アラファト。それは慈悲、悲しみ、別離、再会、郷愁、祈り、嘆願がお互いに入り混じった、地上における天空の回廊なのです。そこでは全てが特別です。あなたは全くけがれのない幼子のようになるでしょう。最初に2つの礼拝をあわせて行い、礼拝後は立ってウクーフ（佇む、の意）やドゥアーを行いません。これは夢の時間のようなのです。何十万もの人々の心からの嘆願が周囲に響き渡ります。時にその声かとだえ、ひざが折られ人は地に倒れこむようにひれ伏します。あたかも天空の扉のきしむ音を聞いているようです。あなたは驚き、鼓動が早まります。ふらつくように地に倒れこむでしょう。あるいは気がつかないうちに、すでに地にひれ伏しているのです。額を地につけ、あなたの顔は土にまみれた状態で、秘められたある岸辺を見出すでしょう、それはあなたを天に至らせ、言葉は失われその地位を心に譲るのです。ある瞬間、あたかも時空が変化し、あなたは「私は見つけた！」と叫びだしてしまわないよう舌を噛み締めるでしょう。そのお方の手があなたの頭を撫でるのを感じた時、あなたは孤独の中で探していた存在を見出したことを確信するでしょう。

一部の人は一定の時間ウクーフとドゥアーを行なった後、ムズダリファへの道を進みますが、預言者ムハンマドが立ったまま、そして片足が疲れた時はそれをもう片方の上に置くという形で、日没までドゥアーをしていたことを知っていれば、あなたもできる限りドゥアーや嘆願を行い、その輝かしい時間を最大限活かすよう努めるでしょう。

ムズダリファに到着すると、月光の明るさがあなたを迎えます。横になって休む本の少しのスペースすら、見つけることはできないでしょう。そもそもこの恵みの夜を眠り農地に過ごすことをあなたの心

は求めないでしょう。ウンマの為に泣かれた預言者ムハンマドに対し、許しが伝えられたのはこのムズダリファなのです。またあるハディースでは「ムズダリファにおける最大の罪は、許されないという被害妄想に取り付かれることである。」とされています。あなたもこの希望の中で、礼拝やクルアーン、ドゥアーに自らをしっかりと結びつけるのです。

あなたは再びミナーに向かいます。ここではシャイターンへの石投げが行なわれます。ここでは通常の犠牲と共に、あなたの理性を、心の犠牲とするのです。ご存知のように、あなたが投げているのはただの石です。あなたが投げた石が、物理的な意味でシャイターンに届くわけではありません。しかし預言者ムハンマドがそのように教えられたのです。あなたもそのお方に従って、手にした小石を投げ、しもべとしての意志、シャイターンや自分自身の我執を責める思いで、シャイターンをもう一度その火で焼くのです。犠牲を屠ること、髪をそること、イフラムと呼ばれるハッジの衣装を脱ぐこと、そして別れの周回などによって、魅惑の旅路は終わりを迎えます。ハッジの時間が刻一刻と残り少なくなっていくこと、日めくりのページが一枚ずつ剥がされていくことはあなたの心を痛めます。ハラームモスクからの別離は、本当につらいものです。愛する存在を後に残していくこと……。預言者イブラーヒームがわが子を残して去っていく時の悲しみをあなたは実感するでしょう。あなたの歩みがあなたをモスクの外へと運ぶ時、あなたの目はもう一度愛する存在を見つめます。あなたにはもう動く元気がありません。まだ離れてもいないのに、その土地への思いが募るのです。そう、その瞬間にあなたを慰めるものが一つだけあります。それはウクーフと周回で清められた形で、ハッジの条件ではないものの、忠実さが要するところの一つである、マディーナへの旅を続けることです。あなたが愛するお方（彼の上に平安と祝福あれ）にお会いしに行くことなのです。

次号に続きます





無常と永遠

この世を天国と考えるものたち。

甘言につられる者たちが、その跡に従う。

その跡に従い、道に留まる者たち。

無為に時を過ごし、自らを損ない、立ち去った。

悲しみ、苦しみ、

道ははるかに長く 的はさらに遠く、

歩まされる者たちは いばらの道を、

知りえぬ的 終着駅はいずこに。

谷があり、坂があり、おおいがあり、

吹雪となり、嵐となり、雪は降る。

ほねおりはいつも井戸の中へ

かわいた谷の水の中へ

たどり着けない岸边の村の中へ

別離のつらさと絶望で、胸は高ることを知らず

辺りは不誠実、ふるまいは情けのかけらもなく

この世は羽車の多い風ぐるま、

あたり一面 真珠やサンゴがちりばめられ、

人は このわなにおちる。

力尽き 疲れに伏し、 捕らわれの身となり 貧しく、

悪魔の網の中で、 悪魔たちは指し示めす。

留まる姿はペテン師、 目にみえるのは偽り、
多くの者たちはやってくる、 だが残る者はだれもない。

うかつな者たちをわなにかけ さらにまたわなをしかけ、

墮落していく者たちは、限りなく、

留まる者たちも みな力尽き、

跡が、道の跡は消し去られることなく、

彼に向かい歩んだ者たちの気高さは知られることなく、

皆ふるい^かにかけられ、だが嘔^かれはふるわれず、

永遠の道のただ1つの聖なる道しるべ、

頂にたどりついた 高きなる預言者。

光の隊の唯一の光、

孤独な魂の 楽しみと喜び

非難するもの者の、越えることのできない城壁

彼を頼るものたちは 喜び 去っていく

したが い 友となり去っていく

あなたのしもべによって、我らは称賛にたどりつく

あなたの光で、我ら道を歩いていく、スルターンよ

あなたのおかげで 我らは愛する、愛されるスルターンよ

あなたなしでは 道をのり越えられぬ、隊商は進まず！

あなたなしでは マフシャル^{*}はなく、だれも生き返らず。

* マフシャル：死後復活した人々が集まるところ、という意味である。ここでは人々に生前の記録書冊が渡され、行動記録が問われ、この世での行いについて裁かれる。



年老いた人々へのメッセージ

9番目の希望

世界大戦の時、捕虜としてロシアの北東にあたるはるか遠方のコストウルアという村にいた。その村には、タタール人のための小さなモスクが、有名なボルガ川のほとりに建てられていた。そこで私は、捕虜となった友人の将校達の中で息がつかなくなってしまった。私は一人になることを望んだ。しかし、外を自由に歩くことは出来なかった。当局はタタールの居住区にあるそのボルガ川のほとりにある小さなモスクに、保釈という形で私を連行してきた。

私は独りでモスクの中に寝ていた。春も近かった。その北の地域の長い長い夜を眠れぬまま明かすことがしばしばだった。その暗い夜、暗黒の異郷の地で、ボルガ川の悲しげなサラサラと流れる音、雨の激しくザーザーと降る音と物悲しい風のため息が、私を深いつかない眠りから一瞬のうちに目覚めさせた。本当のことを言うと、自分が老いていたとは気づかなかったのだが、世界大戦を経験した者は皆、老人といえるだろう。まるで、『子供が(恐怖のあまり)白髪になる日、』(衣を纏う者章7 3/1 7)の神秘が明示されたのかの如く、すさまじい日々であったので、子供たちを老いさせると共に、40歳であった私は自分自身を80歳のように感じたものだ。その暗い長い夜、寂寥とした異郷の地でわびしくなり、人生からも祖国国民からも希望を失ったように感じた。私の無力さ、孤独さに気づいた時、私の希望は失われた。しかし、そんな状態に陥った時、英知なるクルアーンは救助に駆けつけた。私は口の中で、「わたしたちには、アッラーがいれば万全である。かれは最も優れた管理者であられる。」(イムラーン章3/173)と言った。私の心も涙を流しながら言った。

「私は独りぼっち、私には誰もいません。私は弱く力もありません。安全を求めます。

平安の扉からお赦しを乞い、援けを望みます。おお、我アッラーよ。」

心はまだ祖国にいる親友達のことを考え、その異郷の地で死ぬだろうと想像しながら、ニーカーズィーミスリーのように私は語った。

「この世の苦しみから逃れ、無限に向かって翼を広げ、

熱望し毎瞬毎瞬飛び続け、呼び叫ぶ、友よ、友よと。」

と親友たちを探し求めていた。

ともかく、その悲しいみじめな孤独な長い夜に、真の主の扉の前で、私の弱さと無力さが大きな仲介役を果たし、又きっかけともなり驚くべきことが起こった。それは、今なお続いているのだが、その

数日後思いもかけぬ事が起こったのだった。徒歩で歩けば一年もかかる距離を、ただ一人ロシア語も話せないのに関わらず、私は逃げる事が出来たのだった。弱さと無力に訪れる神からの援助によって、驚くべき方法で私は救われた。ワルシャワとオーストリアを經由してインタンブールまでやってきたのだが、その道中が容易で助け出されたのは、私にとって驚くべきことだった。ロシア語を知っている最も勇敢で、最も機転の利く者たちが成功しなかったことを、いともたやすく簡単にその長い敵からの逃亡の旅を終えたのだった。

ところが、そのボルカツのほりにあるモスクで、今まで語ってきた夜は、私に残り人生を洞穴で過ごすという決意をさせたのであった。人間たちの社会生活に関わって生きるのはもう十分である。そもそも、最後には一人で墓に私は入るのだ。孤独に慣れるために、今から孤独を望むと私は自分に語りかけた。

しかし、不幸にもイスタンブールの誠意ある多くの友人とイスタンブールの輝けるこの世の生活、特に則を越えた私に与えられた名声や栄誉などが、私の決意を一時忘れさせた。その異郷の地での夜は、私の人生という目にはまるで、輝く黒（暗黒）に映った。そして、イスタンブールの白、よく飾られた昼は、私の人生という目には光のない白であり、先を見ることは出来なかった。それは、再び眠りについた。それから二年も過ぎた頃、ガヴスイ・ゲイラーニーは、ブノーフルガイブという本によって、再び私の目を開かせた。

さよう、ご老人、ご老婦に方々よ。老いの秘める弱さ、無力さは、神の慈悲と恵みを得るためのきっかけとなる事をご理解なさい。私が自分自身の出来事から説明したように、地上での慈悲という御名の顕示は、大変分りやすい方法でこの真実を示している。なぜなら、動物のうち最も無力で弱いのは、動物の子供達である。しかし、それにも関わらず、慈悲の中で一番かわいらしく、最も良いものも彼らが示しているのである。一本の木の上にある巣の中の一匹の雛鳥の無力さが、その母鳥を従順な兵士のような仕えさせることによって、慈悲を顕示する。その母鳥は、雛の周りを飛び回り、餌を運んでくる。そして、雛の翼が強くなり、無力を忘れる頃になると、母鳥は雛鳥に「さあ、行きなさい。そして餌を探しなさい。」と言い、もはや雛鳥の言う事を聞こうとはしなくなる。

さて、この慈悲の秘密が雛鳥たちと同様に、老いた人々によっても明示される。私には、確たる明示を与えた様々な経験がある。それは、子供達の無力さゆえに、神の慈悲により糧が驚くべき方法で、つまり乳が口から入り、そして中へ流れ込むことである。そのため、罪を犯すことを避けようと努める信仰のある老人達の糧もまた、豊かに送られてくるのである。一家の豊富さの柱は、その家の腰の曲がった無力の老人達、老婦達であることを聖ハディースの一部である、「信仰のない動物達、乳を吸う赤ん坊、腰の曲がった老人達がいなかったら、災難は洪水のようにあなた方に降りかかったであろう。」という、命によってこの真実を明らかにしている。

さよう、老いの中の弱さと無力さは、このように神の慈悲の顕すきっかけとなる。英知なるクルアーンにも、

「もし両親かまたそのどちらかが、あなたと一緒にいて老齢に達しても、かれらに「ちえっ」とか荒い言葉を使わず、親切な言葉で話さない。そして、敬愛の情を込めて、両親に対し謙虚に翼を低く垂れ（優しくし）て、『主よ、幼少の頃、わたしを愛育してくれたように、二人の上に御慈悲をお授けください。』と(祈りを)言うがいい。(夜の旅章 17/23-24)」という節によって五通りの奇跡的な方法で、老いた父と母に対して敬愛を持つよう命じている。そもそも、人間の本性は老人達に対する敬愛を必要とする。さよう、我々老人達は、若さを熟する者たちのつかの間の物への執着の代わりに、精神的永続的で重要な神への信仰と人間という種へに対する憐憫の情から生まれる慈悲と敬愛の情、また、その慈悲と敬愛の情から生まれる魂を揺り動かす喜びを得るのである。そのため、我々は我々の老いを百の若さと変えようとしてはいけない。さよう、あなた方に確信して申し上げるが、旧サイドの十年間の若さを与えたとしても、私は新サイドの一年間の老いの時を渡すことはしないだろう。私は老いを受け入れている。あなた方も受け入れるべきである。





イスラームを受け入れること、あるいはその崇高な任務を理解し実行することは、時に、竹を育てることに似ています。

何故だと思いませんか。

その答えは、竹がどのように育つのかを知ることによって見出すことができます。

まず最初に、種子が蒔かれ、水が撒かれ、肥料が与えられます。

最初の年には、種子には全く変化が見られません。

再度、水と肥料が与えられます。

2年目も、竹の芽が土から出てくることはありません。

同じことが3年目にも4年目にも繰り返されます。水と肥料が与えられますが、この期間内には、芽が出ることはありません。

農家の人は非常に辛抱強く、5年目にも竹に水を撒き、肥料を与え続けます。

5年目の終わりごろ、竹はようやく発芽を始めます。そして非常に短期間、約6週間で、それは27メートルの高さにまで達するのです。

ここで最初に浮かぶ質問があります。

竹は、6週間で27メートルに達したのか、それとも5年間でそれに達したのか、ということです。

答えはもちろん5年です。

もし5年間、種に水が蒔かれず、肥料が与えられず、大きな忍耐が示されていないならば、竹の成長はありえないことなのです。竹は存在すらしていなかったことでしょう。

つまり、5年間の長い待ち時間、穏やかな軟化、継続的な肥料の供与と土の成分の化学的・物理的変化、水の供給、日光によって温めることなどが、竹の種子に胚を形成させるのです。

もちろん、これは勝手に起こることではありません。

全ての要因を造られるお方、神が、全ての要因を揃え、発芽するよう命令を与えたのです。それによってそれは確かに起こり、起こり続けるのです。その生命を与える息吹によって、種子は成長するのです。

人の個性は、固くタフな竹に似ていることがあります。

彼らは最初、時間をかけることがあります、結果としてすぐに自分達の出発の遅れを取り戻します。

この期間は3年かもしれないし、30年続くこともあります。彼らは人を待たせ、あるいはおそらく、自分達を待っているのです。

彼らは私達の涙、汗、そして努力を吸収します。無限の真空のように。その時が来て、彼らをリードしていた人々に追いつく位の速度で上昇するまで。

アスリートのように、ゴールラインに近づいた時には、彼らの莫大な努力はあらゆる差を埋めることができ、彼らは最初にゴールするのです。

真実を受け入れるまでどの位の間人を待たせるか、あるいは自分自身を待つか、ということは、その人の意志の力、性格、そして現在の状況によります。

しかしここでは当然、その性格が一つの役割を果たします。

人は、自分が最も必要としているもの、彼らの性格のうち最も優勢であるものに適したものを与えられなければ、満足を感じることはありません。

例えば、その人の性質のうち優勢であるものが、アッラーの美名のうち、「愛情豊かである」「愛される」によって反映されるものであるなら、彼らは他の何かを受け入れたり、その心に招き入れたりする前に、愛情を必要とし、求めているのです。

これは、人が変わろうとする際の鍵となるのです。十分な愛が示された場合にのみ、彼らは和らぐでしょう。これらが起こらない場合は、彼らも譲らないでしょう。

一部の人々のイスラームへの改宗において、これらは見出されます。

時には、長い長い投資の後、寝耳に水のような形で人々が宗教を受け入れた時にも、それは一見、些細な出来事によって引き起こされたことのように思えたとしても、これらが見出されることがあります。

どんな些細なことであれ、この大転換を引き起こすことはありえます。その鍵が何であるかを知る

ことは、私達の仕事ではありません。

私達のなすべきことは、この教えの基本を示すことによって、待ち続け、肥料を与え、愛情を込めて育てることです。このような活動を実行する人達は、最もエネルギーを費やし、最も苦しむ人となるでしょう。

多くの、誰にも知られていない英雄達があります。

彼らは自分の涙と額の汗で、将来の種子の為に水を撒いたのです。

この人々のことはどこかで言及されることも、それが聞かれることもありません。

彼らは休むことがありません。花のにおいをかいだり、努力の成果を味わったりすることに時間は費やしません。

彼らはただアッラーの為に努力します。

ほんの些細な行動、この上なく些少な努力が、時には実を結ぶこともあります。

しかし、果実を積む人だけが、称賛を得るのにふさわしい人ではないのです。

その称賛は、木の成長や果実の成熟に貢献した全ての人々に与えられるでしょう。

公正で全知であられる神は、物理的な外見だけを見て判断されることはありません。神はその本質、現実に従って判断されるのです。そして神は誰も無視されず、何も忘れられず、皆の努力に完全に報われるのです。

西暦630年1月11日（ヒジュラ暦8年、ラマダーン月20日）のマッカ征服の跡でムスリムになったマッカの人々は、ある意味で竹のようです。

預言者ムハンマドは610年から612年にかけて、13年、彼らを信仰へと招きました。

預言者ムハンマドはその聖なる涙と額の汗で、彼らの心に水を撒きました。

そしてマディーナで、8年間辛抱強く待たれました。

ついに630年、すなわち布教の開始から21年目にして、預言者ムハンマドと彼の立派な仲間達の彼絶え間のない熱意と努力によって世話をされ、水を与えられてきた彼らの岩盤のような心で、信仰の芽が生まれたのです。

それは枝を伸ばし、花を開き、最後には果実を実らせました。

竹の成長には5年かかるといわれますが、これらの信仰を持たない人達の発芽には、21年がかかったのです。

彼らが成長し始め、預言者ムハンマドからイスラームを学ぶことができたことに対し、神に感謝します。

結論として、あなたは自分が蒔いたものを収穫するのです。

私達は、果物を集める人であろうと努力するべきではないのです。

それは私達の役割ではありません。

私達は種子の世話をし、愛情を込めて水を撒く者です。

他者を正しい道に導くために時間と努力を費やすことは、アッラーを喜ばせるでしょう。

これが私達の最終的な目的であるべきなのです。

人々が熟すのを待つべく備える人々、彼を正しい道に導くことができるよう、その心が開かれることを21年間でも我慢強く望む人々は、まさに預言者の道に続く人、導きと招きの道を行くのです。

忍耐なしでこの道を進もうとする人は、何も成し遂げることができないでしょう。





『ツバル』 TUVALU

10月にラマダーンとイード・ル・フィットルが無事終わりました。皆様いかがお過ごしでしたでしょうか。次なるイスラームの大きな行事は、巡礼と犠牲祭です。犠牲祭は、今年はなんと12月30日から1月3日という、大晦日～お正月にかかる日付になりそうです。

犠牲に関して・犠牲祭に関しては、他の方がこの号でもっときちんと述べられているかもしれませんが詳しくは書きませんが、犠牲は巡礼のあれこれある儀式のうちの最後に行われるものです。そこでのメインは巡礼であり(もちろん犠牲にも深い意味があり、とても重要ではありますが)、巡礼月(ズール・ヒッジヤ)の決められた日に巡礼を行う事により、ムスリムの五行のうちの一つが果たされることになります。

その巡礼に行ってきた方の話を聞くと、世界中から様々な人が集まってきており、「同じ」ムスリム同士とはいえ考えられないような出来事がたくさん起こったそうです。

人々は、たとえ同じ土俵の上に乗っていたとしても(逆に、同じ土俵の上だからこそ?)、なかなか分かり合うのが難しいものなのですね。どうしたらこの状況は打破出来るのでしょうか。

今回は、どうしたら言葉の違う世界にも自分の言いたい事・やりたい事がうまく伝わるのか考え、ローテクな手法でそれを実現してみたというお話です。

どこかの時代の、とある国。荒れた土地の一角にある室内プールで、アントンは管理人である父の手伝いをしていた。プールにはほとんど人が来ないのだが、盲目である父は施設の心臓部である巨大ボイラーの手入れを決して怠らず、今でもプールが人々に愛されていると信じている。プール施設の外に一度も出たことのないアントンの夢は、船長になって航海の旅に出ること。ある日、常連客の元船長に連れられてやって来た娘のエヴァを見たアントンは、彼女に一目惚れする。エヴァもアントンに惹かれるが、それよりもボイラーの部品を手に入れて父の船の修繕をし、南の島・ツバルへ船出することを夢見ている。

そんな中、町の再開発に関わっているアントンの兄グレーゴルは、厄介者のプール施設を町から撤去したくて仕方がない。彼はあの手この手で、プールを閉鎖に追い込もうとするのだが…。

短編映画専門の監督が初めて撮った長編映画で、(ほぼ)モノクロ・(ほぼ)サイレントの映画です。セリフはほとんどありません。ほとんどがジェスチャーで話が進んでいきます。これは何故かというと、監督がチャップリンが好きだということもあるようなのですが、一番の理由は「言葉がわからない人が見ても、わかる映画にしたい」からです。ドイツ語にはドイツ語のニュアンスがあり、翻訳によって何かが失われてしまうかもしれません。そもそも、ドイツ語がわからない人達にとっては、翻訳されなければドイツ語の映画は意味を成さないものになってしまいます。ですが、言葉を介さずに伝えられるものは、言葉以外の方法で理解されるため、言葉のわからない人にも伝える事

が出来るのではないのでしょうか。

もちろん、例外もありますし、理解に必要な文化のバックグラウンドもあります。また、果たしてどのくらいの国でこの映画が公開されたのか等を考えると、一概には「そうそう」とうなづけないのですが、この監督の意向には一理あるように思います。

話自体は不思議な話で、面白いのか面白くないのか、映像の作りがアートなのか適当なのか、様々に悩むところもあります。ですが、言葉はなんのためにあるのか、人と意思疎通を図るには何が必要なのかなど、様々なことを考えさせてくれるとても興味深い映画でした。

冒頭にあげたハッジに行かれた方は、マッカでは様々な出来事があり、信じられないような事もたくさんあったけれど、そこから得るものもとても大きく、行って本当に素晴らしかったと言っていました。

言葉だけによって物事や人の気持ちが伝わるものならば、アラビア語は本当に難しいので、このように様々な世界から様々な人々が巡礼に一つの場所にやってくる、というような状況は無かったかもしれません。一体何が、このような状況を作り出したのでしょうか。

今年ハッジに行かれる人も、行かれない人も、犠牲祭の意味に想いを寄せ、更には自分の言葉が全く通じない世界中の場所でも同じ事が行われているという事を想い、その時間を大事にお過ごしください。

『ツバル』1999年 ドイツ 92分

監督：ファイト・ヘルマー

出演：ドニ・ラヴァン(アントン)／チュルパン・ハマートヴァ(エヴァ) 他





電車に乗っていて思ったことがあります。

ある日の電車の中。まさしく今どきの若者といった格好の男の人が、携帯電話で話していました。大きな声で話しているので、内容が周りにまるきこえです。私も、別にききたくはないのですが、声が大きすぎて勝手に話が耳に入ってきてしまいます。

どうやら、別れ話のようです。しかも、その男の人は、別れ話を切り出しているのではなくて、切り出されている方ようです。つまり、ふられている最中ようです。だからこそなのでしょう、男の人は、もう必死です。声もますます大きくなっていきます。動揺、そして哀願、ニュアンスが全部伝わってきます。全然関係の無いはずの私が、きいているだけであまりにも切なくて、思わず耳を塞ぎたくなるような展開です。

電車の中の携帯電話での通話は、「迷惑行為」と言われていますが、あれは迷惑というより、本人が一番恥ずかしいのではなかったのかと思います。

またある日の電車の中。少し離れたところで、若い女性が話しているのがきこえます。相手の声が全然聞こえないので、最初は電話かな？と思いましたが、きいているうちに、何となく違う気がしてきました。人影に隠れていた相手の人が見えて、やはりその人は電話で話しているのではなかったと分かりました。相手の人の声が低くて、必要最低限のあいづちしか打っていなかったのも、まるで一人で話しているようだったのですね。

でも、一人で話しているようなのに、何となく電話ではないと思った、その何かは何なのだろう？とふと思ったのです。そこで考えてみたのですが、それは、話をきいてくれる人が近くにいる、ということが、一つの要因になっているのではないかなと思うのです。

もちろん、別れ話ということ自体が特別なものなのかも知れません。でも、同じ電車の中で、電話で話している人の言葉は、一部が分散してあたりに飛んでしまっている感じがしました。だから、関係の無い私も、その言葉を受信してしまって、あるいはその背後の思いまで何だかよく分からないうちに一部キャッチしてしまって、耳を塞ぎたくなるほど切なくなってしまったのかも知れません。

一方、相手の人がいる場合の言葉は、思いまで含めてちゃんとその人が全部受けとめてくれているので、こちらは安心していられます。あるいは、受けとめてくれる人が近くにいるから、もともと、発信する人もその人が受けとめられるように言葉を選び、思いの出し方を選んでいるからかも知れません。

私もやすらぎに文章を書いている時、読者のあなたに届くようになるところまで心がけるようにしています。でも、ワーワーと分散した言葉ビームになってしまわないよう、気をつけようと思います。

* 今回のエッセイのタイトルは、THE PLAN 9 第12回本公演 『サークルS: 星を観るものと、星になるもの』に発想を得ました。

購読価格 (郵送料込み) バックナンバーは、1部 200円 (日本以外は1部 250円)

国内: 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外: 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号: 00100-6-354012 口座名義: 月刊誌やすらぎ

三菱東京UFJ銀行 店番号: 630 (春日部) 口座番号: 1134374 口座名義: 月刊誌やすらぎ
皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> info@yasuragiweb.com yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部